テーマ　文明の比較史　―都市と王権をめぐって―

総合司会　東洋史学専修　李　成市氏

趣旨説明　西洋史学専修　小倉　欣一氏

報　告

古代エジプトの場合　考古学専修　近藤　二郎氏

イスラムの場合　東洋史学専修　佐藤　次高氏

中国の場合　中央大学　妹尾　達彦氏

コメント　西洋史学専修　前田　徹氏

日本史学専修　川尻　秋生氏

討　論

▽懇親会　西北の風

平成一八年度早稲田大学史学会大会報告

〈日本史部会〉

神宮祭祀と斎王　―三節祭を中心にして―

岩崎　彰子

斎王とは、天皇の即位ごとに未婚の内親王あるいは女王から卜定されて、伊勢神宮に奉仕する女性のことをいう。しかし、伊勢神宮に奉仕するとは言っても、斎王が伊勢神宮に赴くのは、式年遷宮の他は三節祭のときのみである。

さて、斎王に関する先行研究は膨大であるが、斎王の神宮への奉仕を中心に扱ったものは意外に少ない。斎王を理解する上で、神宮における斎王の役割を探ることは必須だと考え、今回は特に三節祭を中心に考察を進めることとした。

三節祭とは、伊勢神宮において六月・十二月に行われる月次祭、九月に行われる神嘗祭の総称である。三時祭とも呼ばれ、神宮で重視された祭祀であり、いずれも十五・十六日が外宮の、十六・十七日が内宮の祭日とされた。

三節祭は、二つの異なる祭祀から構成されているのが特徴である。外宮・内宮それぞれの祭日の初日（外宮では十五日、内宮では十六日）の夜半から行われる由貴大御饌神事と、翌日（外宮では十六日、内宮では十七日）の日中に行われる奉幣祭である。ここで注目しなければならないのは斎王の役割であるが、その斎王が奉仕するのは

後半に当たる奉幣祭のみである。そこで、今回は特に奉幣祭に注目していくこととした。

三節祭の具体的な内容については、延暦二十三年に神宮から中央に上奏した解文である『皇太神宮儀式帳』（以下、『内宮帳』）と『止由気宮儀式帳』（以下、『外宮帳』）に詳しい。それによると、奉幣祭において斎王の積極的参加が見られるのは玉串奉奠のみである。では、玉串奉奠にはどのような意義が見出せるのだろうか。

『内宮帳』・『外宮帳』の玉串に関する記述を追うと、玉串の諸特徴が理解される。玉串は神宮の雑人が製作すること、玉串奉奠には重層的請負システムが存在すること、『内宮帳』ではその起源は天岩戸神話であるとすること、祭員が玉串を給わる際に拍手をすることから、それ自体に聖性が認められると考えられることなどである。そうした特徴の中でも特に注目すべきは、玉串奉奠において、玉串は他の奉献物のように宝殿や正殿に奉られないという点である。この点から、玉串は神への捧げ物ではないと考えられるのである。では、玉串とは一体何なのか。玉串奉奠では、最終的に玉串は門（後述）に置かれており、門が境界を示すものであることを考えると、玉串奉奠は普段は正殿に留まる神を祭場に招く行為であると考えられるのではないだろうか。先述の通り、『内宮帳』は玉串の起源は天岩戸神話にあるというが、この神話でも、玉串は岩戸にこもるアマテラスを呼び出すため、つまり神を招くものとして作用したと解釈できる。

さて、三節祭における玉串奉奠は斎王によるもののみではなく、その後で大神宮司、禰宜らによっても行われるが、斎王が捧げ持つ玉串は瑞垣御門に、その他の祭員らが捧げ持つ玉串は玉串御門に置かれる。瑞垣御門は正殿に最も近い門であるのに対し、玉串御門はより遠く、南方に位置する門である。つまり、二度にわたる玉串奉奠により神を段階的に祭場に招くのだと考えられるが、斎王がそれを最初に行うというのは意義深いものである。しかも、斎王による玉串奉奠によって奉幣祭は開始されるのであり、斎王はまさに神を最初に招く、「顕神」という重要な役割を担っていたと言える。

更に注目すべきは、斎王は他の祭員と違って、玉串奉奠以外には主体的に神を祀る行為に関与しない点である。他の祭員が「神を祀る存在」であるとするならば、斎王は「祀る為の神を招く存在」であると言えよう。式年遷宮において斎王は玉串奉奠を終えると神宮を去り、その後斎王が不在のまま神事が進行するのも、その為ではないだろうか。他の祭員とは役割を異にしているのである。斎王が他の祭員と隔絶した位置にあるのは、奉幣祭の最後に他の祭員に禄を給う点、正月三日に禰宜・内人・物忌らが斎王を拝す点、斎王が行動する際には必ず女官を伴い、直接他の祭員と対応しない点からも明らかである。

以上、斎王は神を祭場に招く、「顕神」する存在であると結論付けた。ただし、この性格が前面に現れているのは内宮においてであり、式次第の相違点から、内宮と外宮における斎王の務めが全く同

質であるとは言い難い。この点を更に明らかにしていくことが目下の課題である。

木村蒹葭堂と長崎の交流ネットワーク

―大坂文人と唐人屋敷の繋がり―

孫　暁　艶

長崎唐人貿易に関する論述は主に貿易状況あるいは唐人屋敷などの制度に関わるもので、経済と制度の視点からの論述がほとんどである。しかし、唐人貿易が日本にもたらしたのは経済的な影響だけではなく、中国の文化風習や生活習慣なども唐人貿易に伴って日本に伝わってきた。このような異文化伝播の視点からの研究は空白な領域がまだ多く存在している。また、近世日本の中国文化受容課題に関わる研究もおもに漢籍輸入や出版文化や宗教などについての研究が進められるが、「人的交流」つまり人と人の付き合いによって成立する交流ネットワークについての研究がまだ不十分のままである。

本報告は幕府の「鎖国」政策の下で、厳重に管理され、交流が限定された長崎唐人屋敷と大坂の文人との繋がり、即ち交流ルートがどのようなものであったのかを明らかにしていきたいものである。具体的には、大坂文人の代表者である木村蒹葭堂を中心に、彼と唐人とをつなぐ長崎交流ネットワークを分析していくのである。

第一に、蒹葭堂は中国商人と書翰を往来したり、品物を贈答したりする関係にあったのである。『蒹葭堂雑録』(1)「橘酒称賛文　清人筆」には、蒹葭堂は蒹葭堂と唐人との交流を示す書翰が残っている。この書翰から、木村蒹葭堂は江南地域出身である程度の文化修養をもっている商人と贈答関係にあったことが分かる。このような人的交流に伴い、江南地域や福建省に流行していた生活文化が蒹葭堂に多大な影響を与えたと考えられる。しかし、この付き合いは直接的なものではなかった。

第二に、蒹葭堂は唐通事を通じて、中国商人とのネットワークを作ったのである。『木村蒹葭堂来翰集』(2)に唐通事神代太十郎からの書翰が残されている。この書翰の内容は、蒹葭堂は太十郎に頼んで、唐人の「沈氏」に品物を注文していること、それに、日本で製造しなかった「釜」という煎茶を飲む時使う水を沸かすための道具の販売についての問い合わせなどである。この書翰から、蒹葭堂の中国文化に対する関心の強さ、それに蒹葭堂⇔太十郎⇔沈氏というネットワークが存在していたことがわかる。つまり、唐通事を通じて、蒹葭堂のような大坂文人が長崎の唐人屋敷に閉じ込められた中国商人に品物を注文し、入手することが可能であった。

第三に、蒹葭堂は長崎唐寺と深い関係を持っていた黄檗僧の人的ネットワークを使い、唐人に繋がったのである。『蒹葭堂雑録』「巽斎翁遺筆」に蒹葭堂みずから書いた経歴が残る。彼は長崎出身の僧